論文要旨

所属ゼミ	髙木晴夫 研究会	学籍番号	80430114	氏名	石丸 慎子

（論文題名）

キャリア・セルフ・マネジメントに関する一考察

～外資系証券会社におけるキャリア形成の調査から～

（内容の要旨）

外資系証券会社が東京証券取引所の会員になって約２０年。その歴史は進出と、選択・撤退の繰り返しであったといえる。

グローバルで日々進化し続ける金融の世界にあって、東京における外資系証券会社は支店であるが故その戦略は本国の意向にも左右される。つまり、組織体としての戦略はそのつど変更されることとなる。すなわち、そこに働く社員の「雇用」における問題もしかりである。雇用の継続性は不確実なものとなり、保証されているものではなくなる。よってそこに働く個人は、自らのキャリアを組織に委ねることなく自覚的に形成してゆかねばならないことになる。

近年、日本の企業社会は大きな変化のうねりのなかにある。大企業の倒産、これまでは考えられなかったような企業同士の合併等、欧米社会の常識である競争原理が日本にも浸透してきているのである。そしてそれは戦後日本の大企業を中心に発達してきた終身雇用や年功序列といった、日本型といわれる雇用システム、人事制度に影響を及ぼしてきている。企業主導で行われてきた個人のキャリア形成の仕組みが崩れ、キャリアが個人の責任の下におかれ始めてきたのである。

ゆえに本論文では、キャリア形成の主体がいち早く個人におかれ、なおかつ雇用における不確実さのなかキャリアを形成してきた外資系証券会社に働くものたちに注目したものである。そして外資系証券会社に働く１０名へのインタビュー調査を通じて、自律的なキャリア形成とはいかなるものか、様々あるキャリア理論の枠組みから彼らのキャリア形成の過程を分析し、なんらかの知見を得ようと試みたものである。

その結果、外資系証券会社に働くものたちには肯定的な強い自己概念がみられ、それに裏打ちされるキャリア・アンカーを持ち、ホールの唱えるプロティアン・キャリアを形成していることがわかった。そしてそのような彼らの現在の姿は、彼らのこれまでのキャリアの途上にあった「分岐点」での決断が積み重なった結果によるものと考えた。

そこで本論文では、彼らがキャリアの途上でどのような分岐点を迎え、どのような考慮項目のもと、どのような意思決定をしてきたのか、それらの考察を行い、その結果からキャリアの歩み方としてのあるひとつのケースを提言として行っている。

しかしながら本論文の真の意義は、キャリアの途上にはどのような分岐点があるのかを提示したことによって、今後自らのキャリア・メイクに挑むものたちに対し、それらに対する察知能力、注意する意識への向上を促し、また分岐点における考慮項目にはどのようなものがあるのかについての事前の知識を与えたことにあるのではないだろうかと考える。なぜなら、キャリアとは多様なものであり、何がキャリアの分岐点となるかには個人差があり、また分岐点における意思決定も何が有効なものとなるか、それはひとにより、何を目指しているかにより、そして状況により、異なるものだからである。